九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

目録を読む難しさ : 唐初の「類書」観を中心として

大渕, 貴之
九州大学高等教育開発推進センター : 非常勤講師

https://hdl.handle.net/2324/18726

出版情報：2010-12-11
バージョン：
権利関係：

目録を読む難しさ —唐初の「類書」観を中心として

九州大学非常勤講師　大渕 貴之

１、中国蔵書目録の概要

（１）定義

目録＝目（書名）＋録（各書の沿革、要旨、校訂の記録等）

※今日の「解題目録」の体裁が本来の「目録」。当初、書名目録ではなかった。

（２）蔵書目録の歴史

目録の創始（前漢・後漢：前３世紀末～３世紀初）：六部分類

A 漢・劉 向（りゅうきょう）等撰『別録』（紀元前1世紀後葉）　佚

２０数年をかけた宮中蔵書の校訂記録。

B 漢・劉歆（りゅうきん）撰『七略』　佚

劉向（劉歆の父）作成の『別録』を継承し、分類等の整理を施したもの。

六部分類：六藝略（儒教経典）、諸子略（各種思想）、詩賦略（詩歌）、兵書略（軍事）、数術略（天文暦法等）、方技略（医療技術）
＋輯略（上記六部の図書の内容と学術の流派を解説）

C 後漢・班固撰『漢書』藝文志（1世紀末）　存

正史『漢書』に附された宮中蔵書の目録（史志目録の始め）。

『七略』を基礎に編纂された。

六部分類（『七略』に同じ）

参考書：顧実『漢書藝文志講疏』（上海古籍出版社、1924 年ほか数版）

四部分類と七部分類（魏晋南北朝：３世紀初～６世紀末）

D 西晋・荀 勗（じゅんきょく）撰『中経新簿』（3世紀中葉）　佚

魏・鄭默撰『中経』（三国魏の宮中蔵書目録）を基礎に編纂された。

四部分類：甲部（六藝）、乙部（諸子、兵書、術数、方技）、**丙部（史書）**、丁部（詩賦）

史部の成立（漢代までは六藝・春秋類に帰属）。

書名、巻数、撰者のみの記載。解題等の無い書名目録の体裁。

三国の統一を受け、文化の回復、発展にともなった図書量の増加が背景。

E 東晋・李充撰『晋元帝書目』（4世紀初）　佚

四部分類：甲部（六藝）、**乙部（史書）**、丙部（諸子、兵書、術数、方技）、丁部（詩賦）

史部が、分類の第二番目に位置。史部書の地位の高まり。

F 劉宋・王倹撰『七志』（5世紀後葉）　佚

『七略』に倣って私に編纂。後に廃帝に献上された。

七部分類：経典志（六藝、史書）、諸子志、文翰志（詩賦）、
軍書志（兵書）、陰陽志（数術）、術藝志（方技）、図譜志（地理書、地図）

G 梁・阮孝緒（げんこうしょ）撰『七録』（6世紀前葉）　佚

『七略』及び『七志』を基礎に、独自の分類。

『隋書』経籍志の分類に大きな影響を及ぼした。

七部分類：内篇：経典録（儒教経典）、記伝録（史書）、子兵録（諸子、兵書）、文集録（詩賦）、術技録（数術、方技）
外篇：仏法録（仏教）、仙道録（道教）

四部分類の定着(隋・唐以降：６世紀末～)

H 唐・長孫無忌等撰『隋書』経籍志(7世紀中葉)　存

現存最古の四部分類目録書。

四部分類：経部(儒教経典)、史部(歴史、地理)、子部(諸子、兵書、数術、方技)、集部(詩賦)、附道経・仏経

隋、唐の宮中蔵書及び前五代(梁、陳、北斉、北周、隋)の目録書を資料として編纂された。

背景に、唐の政権樹立直後に行なわれた、図書の収集、整理活動がある。

参考書：興膳宏・川合康三『隋書経籍志詳攷』(汲古書院、1995 年)

I 唐・毋煚撰『古今書録』(8世紀前葉)　佚

玄宗開元の治のもと、文化の隆盛で図書量が増大。

相次ぎ編纂された宮中蔵書目録の一つである『群書四録』を補訂して編纂。

四部分類。『旧唐書』経籍志の依拠資料となる。

J 後晋・劉昫等撰『旧唐書』経籍志(10世紀中葉)　存

唐開元期の現存書目『古今書録』に基づいて編纂された。書名目録の体裁。

→これ以降の歴代正史には、宮中蔵書目録を載せるものもあるが、目録学的価値は低いとされる。

私撰目録の盛行（宋、元：１０世紀後葉～１４世紀後葉）

私撰の蔵書目録は、梁(6世紀前半)の頃には一般化していたようだが、南宋(12世紀初~13世紀中葉)以降、版本の流通量が増大するのにしたがい、盛んに編集されるようになる。

K 南宋・晁公武撰『郡斎読書志』(12世紀中葉)　存

赴任地の官衙及び自己の蔵書 24,500 餘巻について、経・史・子・集の四部に分け、巻数、編撰者及び内容の大略を記す。

参考書：孫猛『郡斎読書志校証』(上海古籍出版社、1990 年)

L 南宋・陳振孫撰『直斎書録解題』(13世紀中葉)　存

自己の蔵書 51,180 餘巻について、『郡斎読書志』の体裁にならって編集。

参考書：徐小蛮・顧美華点校『直斎書録解題』(上海古籍出版社、1987 年)

※**K**・**L** ともに、唐～宋の典籍について知る重要な資料。

目録(学)の隆盛（明、清：１４世紀後葉～２０世紀初）

明清期には、官撰、私撰の各種目録作成に加え、目録を対象とする学問も発達した。

M 清・紀昀等撰『四庫全書総目提要』(18世紀後葉)　存

清・乾隆帝の敕命による『四庫全書』(中国史上最大の叢書。3,503 種、36,304 冊)の編纂に際し、各書の冒頭につけた提要(著者小伝、書の沿革・真偽、内容の大略等の要約)を総合したもの。

２、蔵書目録を用いた研究例（各種目録における分類の異同に、思想、学術の趨勢を読む）

①子部書について、歴代目録における分類の差異とその背景を考察するもの

金文京「中国目録学史上における子部の意義―六朝期目録の再検討」

『斯道文庫論集』第 33 輯（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、1999 年）

※中国目録学研究の重要性、意義について論述する一環として、子部の問題を取りあげる。

②史部の成立、独立について考察するもの

重澤俊郎「文献目録を通して見た六朝の歴史意識」

『東洋史研究』第 18 巻第 1 号（東洋史研究会、1959 年）

井波陵一『知の座標：中国目録学』第一章「図書分類法の時代区分」(白帝社、2003 年)

３、目録を読む難しさ：唐初の「類書」観を例として

唐代初期の二つの勅撰書とその目録(『旧唐書』経籍志)上の分類

『藝文類聚』(武徳７年[624])　丙部子録**類事類**(宋代以降の類書類)

『群書治要』(貞観５年[631])　丙部子録**雑家類**

●分類の違いにより、両者がともに考察の対象とされることはなかった。

○両書の序文に依れば、ともに魏の『皇覧』、梁の『華林遍略』を祖に位置づける。

→あらためて両書をともに視野に入れた上で「類書」観を考察する必要性。

目録が示すのは、目録作成時（改編時）の「知の表象の世界」。

目録が収録対象とする時代そのものの知的枠組みを把握するための留意点。

拙稿「唐創業期の「類書」概念：『藝文類聚』と『群書治要』を手がかりとして」

『中国文学論集』35 号（九州大学中国文学会、2006 年）

【項目１・２の参考文献(中国目録学の概説書)】

日本語の文献：

清水茂『中国目録学』（筑摩書房、1991 年）

井波陵一『知の座標：中国目録学』（白帝社、2003 年）

中国語の文献：

余嘉錫『目録学発微』（中華書局、1963 年ほか数版）※目録学の古典的著作

姚名達『中国目録学史』（商務印書館、1938 年ほか数版)※附録に各種分類の対照表

来新夏『古典目録学浅説』（中華書局、1981 年)※コンパクトな入門書